

光藤 佐展 気韻生動
九月十七日(土)―二十五日(日) 会期中無休



白磁赤絵鉢



線刻扁壺



志野茶碗



青磁白黒象嵌梅瓶



黒線部茶碗



白磁獅子狛犬



白磁片口酒注



掻落鉢



黒釉扁壺

料金後納
ゆうメール

光藤 佐展 気韻生動

二〇一六年九月十七日(土) ～二十五日(日) 会期中無休
 営業時間 十一時～十八時 作家在廊日 九月十七日(土)・十八日(日)

兵庫県朝来市に暮らす光藤佐さん。天空の城で知られる竹田城もほど近い自然に恵まれた静かなところ。光藤さんの手がける器は、朝鮮や桃山時代の古陶に通じる作風を主にしていますが、それを評するに肝心なのは、外形の忠実な再現性よりも、その器の風雅を捉える勘どころの上手さに気付くことではないでしょうか。抽象的な言い方になりますが、結局のところ器の善し悪しというのは、作り手の文化的素養から滲み出てくる気品なのだと思うのです。

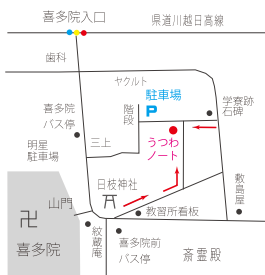
小さい頃に茶を学び、20代には料亭のお庭窯で作陶の傍ら料理を覚え、今の地に落ち着いてからは書や短歌を嗜む文化人でもあります。書の筆運びはろくろの呼吸に通じ、短歌の語句から膨らむ情景は、うつわの景色にも重なります。陶芸に触れたのは早熟の15歳。それから38年にもなりますが、技術とともにその背景となる感覚を磨いてきたことが、今の光藤さんの器を形成しているのです。

5世紀末の中国の画論家・謝赫が、制作や観賞の規範を記した「画の六法」があります。その中には、描線、形体、色彩、構成、模写の5つの技術的な尺度を示すとともに、もっとも肝心なこととして「気韻生動」という言葉を挙げています。「気韻」とは気品や風格のある味わい、「生動」とは生き生きとして見えること。つまり技術以上に抽象的な感覚の大切さを説いているのです。

今回、光藤さんの器の在り方を踏まえて「気韻生動」をテーマに据えました。使う人と響き合って器により深い意味が付加されることでしょう。お互いの思いが通じる展示会になればと願っております。ご都合宜しければご覧ください。 店主

光藤 佐 プロフィール

- 1962年 兵庫県宝塚市生まれ
- 1978年 中学を出て京都府立陶工職業訓練校で学ぶ
- 1980年 京都の窯元で職人として働く
- 1982年 京都精華大学美術学部に入り絵を描く
- 1986年 京都の料亭のお庭窯で職人として働く
- 1989年 兵庫県にて築窯し独立する
- 2016年 現在、兵庫県朝来市にて制作する



電車：川越駅(東武東上線・JR)より徒歩25分
 本川越駅(西武新宿線)より徒歩20分
 バス：駅東口3番乗場 [小江戸名所めぐり]～[喜多院前]
 駅西口2番乗場 [小江戸巡回バス]～[喜多院]
 車：ギャラリー専用の新駐車場は北側(5～8番)

ギャラリー うつわノート

埼玉県川越市小仙波町1-7-6
 TEL 049-298-8715
 MAIL utsuwanote@gmail.com

